

与那国島トゥグル浜遺跡の編年的位置の再検討

Reconsideration on the Chronological Position
of Tuguru-bama Site in Yonaguni island

安里 嗣淳
ASATO Shijun

ABSTRACT: In the Neolithic chronology of southern Ryukyu that I had proposed in 1989, I placed the Tuguru-bama site of Yonaguni island in the Late Prehistoric period. I also added a note to demonstrate a possibility that the site might belong to the Early period, because of its geological location. In general, the site of Early Prehistoric period are situated on low hills near the coast, and so is the Tuguru-bama site. The latest examination of the site proved that the upper sand layer that covered the site was the 'Late dune' that belong to the Late period. Therefore, the Tuguru-bama site must be placed in the Early period.

序

八重山の新石器時代の編年については、従来のいわゆる早稲田編年の場合無土器期（第一期）から有土器期（第二期）へという順序で位置づけられていた（西村正衛ほか 1960 p.168）。その後、石垣島の大田原遺跡（第二期）と神田貝塚（第一期）および波照間島の下田原貝塚（第二期）と大泊浜貝塚（第一期）の発掘において、第一期と第二期の層位関係が逆転することが明らかとなった（金武正紀ほか1982,1986）。この事実を受けて、私は1989年に「南琉球無土器新石器期の位置」と題する小文を発表し、宮古諸島を含めた南琉球新石器時代の編年表を提起した（安里嗣淳1989 p.668）。そのなかで与那国島トゥグル浜遺跡は土器を伴わないことから後期に位置づけたが、立地上の理由から前期の可能性もあるのではないかと考え、表の外に「トゥグル浜遺跡は発掘範囲（約1,500平方メートル）は無土器だが、遺跡の立地は石灰岩台地の赤土上に形成されていて、前期的様相を呈している」と註を付しておいた。将来の再検討の余地を残しておきたかったのである。

その後、前期遺跡として石垣島西部のピュッタ遺跡、宮古郡多良間島の添道遺跡が、後期遺跡として竹富島のカイジ浜貝塚、多良間島の西高嶺遺跡、宮古島のアラフ遺跡などが発見され、その立地について再検討できる遺跡が増加している。そこで、かねてから気になっている与那国島トゥグル浜遺跡の編年上の位置について、後期ではなく前期に属するのではないかという観点から再検討してみたい。

1. 1989年に提起した編年とトゥグル浜遺跡の位置づけ

図1aに1989年に提起した南琉球圏（宮古・八重山諸島）新石器時代の編年を示す。この編年は先史時代を前期と後期に区分するものであるが、両時期は遺跡の立地においても異なる特徴があるとした。すなわち、前期は海岸に近い低い赤土台地に、後期は離水した海浜砂丘に遺跡が形成されているという立地上の特徴である。一方、前期は下田原式土器を伴う有土器文化で、後期は土器をまったく伴わない文化という相違点もきわめて大きな特徴としてとらえられる。当該編年においては、この土器文化の有無を最優先すべき基準として与那国島トゥグル浜遺跡を後期に位置づけたのである。トゥ

グル浜遺跡は1983年に発掘調査がおこなわれた範囲からは、土器はまったく出土していない（安里嗣淳ほか 1985）。したがって、土器の有無の基準からすれば後期に属するのである。ところが一方では、海岸の低い石灰岩を基盤とする赤土小台地に形成されていることから、立地を基準にすると前期になる。結局土器が1点も得られていない以上、前期には位置づけられないと判断したのである。それでも当時はたまたま発掘範囲から土器が検出できなかっただけで、実は土器を伴うのではないかという懸念が片隅にあって、当該編年表の欄外註において発掘面積も付したのであった。

2. 國分直一による編年の見直し

いわゆる早稲田編年の第一期と第二期が逆転するのではないかとする見解は、私の編年案提起の前に別の観点から國分直一によって示されていた（國分1989 p.12-17）。國分はすでに明らかとなっていた沖縄県教育委員会による先述の発掘成果を用いずに、1989年に遺跡の地層の分析から早稲田編年の第一期と第二期の序列が逆転すべきことを説いたのである。國分の見解は次のとおりである。

「その根拠は、仲間第二貝塚と第一貝塚は僅かに200メートルしか離れていなくて、共通の暗褐色土層の上ののっているが、仲間第二貝塚は基盤の暗褐色土層の上の黒土層中に包含されているのに、仲間第一貝塚は、仲間第二貝塚の混土貝層を含む黒土層の上の腐蝕土層に含まれている。従って時間的に見て、仲間第一貝塚の形成は仲間第二貝塚の形成期より下降する時期であることは明瞭であろう。波照間島の下田原貝塚は赤褐色の基盤層上にありこの土層は仲間第一、第二貝塚地区の褐色土層に対応する土層とみてよかろう。従って、下田原の貝塚が基盤層に直接載っていて、黒土層下に形成されていることは、仲間第二貝塚の形成期に先行するとしても、遅れることは考えられない。」

國分の引用文にいう「暗褐色土層」、「赤褐色の基盤層」とは一般に石灰岩の上層に形成される風化土壌（沖縄本島ではマージと称する）のことであろう。私がさきの編年表および本文で赤土と称しているもののひとつも、このマージ層である。石灰岩地帯における発掘調査ではこの赤土層が現れると、基盤層に達したと判断している。國分は有土器期の仲間第二貝塚と下田原貝塚の文化層はこの赤土層の直上に形成されているが、無土器期の文化層はさらに黒土層を挟んでその上に存在することから、その前後関係は下田原期（有土器期）を古く、仲間第一期（無土器期）を新しく位置づけるべきだとしたのである。

この見解にもとづいて國分は与那国島トゥグル浜遺跡の時期についても次のように言及している。「八重山一宮古諸島の『無土器文化』といわれているものは、新期砂丘上に営まれているものが多い（中略）、トゥグル浜遺跡の石器文化が、真の意味における先土器の技術を示すものかどうか。調査にあたった研究者のご教示をえたいと切望している」。國分の慧眼には敬服する次第である。私のこの小論は石器技術にはあまりふれないが、國分が編年の逆転の見解を導き出した地層の検討に沿って述べていくこととするので、回答の一端にもなろう。

3. 南琉球新石器時代の遺跡立地とトゥグル浜遺跡

これまでに発掘調査の実施された南琉球新石器時代の遺跡について、その立地をあらためて概観しておきたい。

3.1 土器が出土した遺跡

3.1.1 大田原遺跡（石垣島）（金武正紀ほか 1980、阿利直治ほか 1982）

名蔵湾の低湿地を囲む丘のひとつで、湾に注ぐ名蔵川の脇に舌状にのびる小丘の先端部に形成されている。丘の基盤は粘板岩層で上層は名蔵礫層とよばれる礫混じりの赤土層である。遺跡はこの赤土

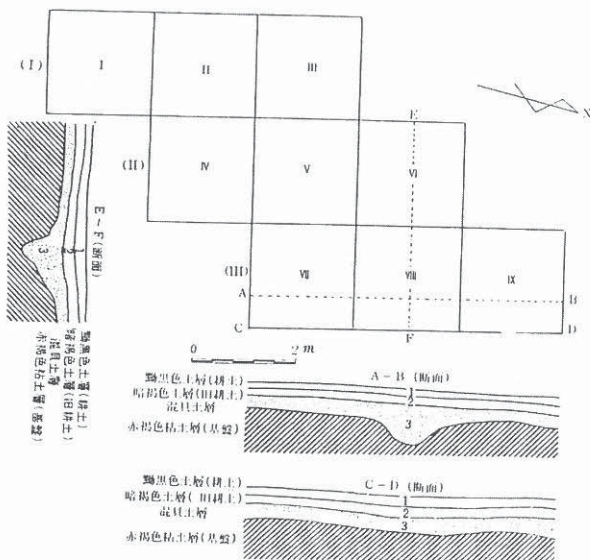
別表3 南琉球圏（宮古・八重山諸島）先史時代の編年

石器の技術段階	新 石 器 時 代			
時期 区 分	前 期		後 期	
遺跡の立地	海岸に近い低地石灰岩地帯の赤土台地や、礫層などの赤土台地に多い		海岸に近い砂地に多い	
貝殻や獣骨	比較的少量		貝殻が多量で、貝塚を形成することが多い	
焼石、焼石遺構	不明（焼石を伴う例はあり）		焼石顕著、一部遺跡で大量の遺構	
石 器	半磨製・局部磨製が多い、比較的扁平で、小型多い		半磨製・局部磨製が目立つ 前期に比較して研磨面やや拡大、ていねいな仕上げ、大型化の傾向。 方角片刃石斧まれに伴う	
土 器	下田原式土器		無土器	
共 伴 遺 物 （在来品）	スライガイ突起部加工品、サメ歯製品		スライガイ突起部加工品、サメ歯製品、貝盤、貝斧（一部遺跡では大量出土）	
時代を示す共伴遺物（外来品）			玉縁口縁の白磁碗。 須恵器。 滑石製石鍋 開元通寶（貨銭）	
遺 跡 の 例	与那国島	未発見 ※	与那国島	トゥグル浜遺跡
	波 照 間	下田原貝塚	波照間島	大泊浜貝塚
	西 表 島	仲間第二貝塚	西 表 島	仲間第一貝塚 南風見貝塚
	石 垣 島	大田原遺跡 フーネ遺跡	石 垣 島	崎枝・赤崎貝塚 名蔵貝塚、神田貝塚
	宮古諸島	未発見	宮 古 島	長間底遺跡 浦底遺跡

※トゥグル浜遺跡は発掘範囲（約1,500平方メートル）は無土器だが、遺跡の立地は石灰岩台地の赤土上に形成されていて、前期的様相を呈している。

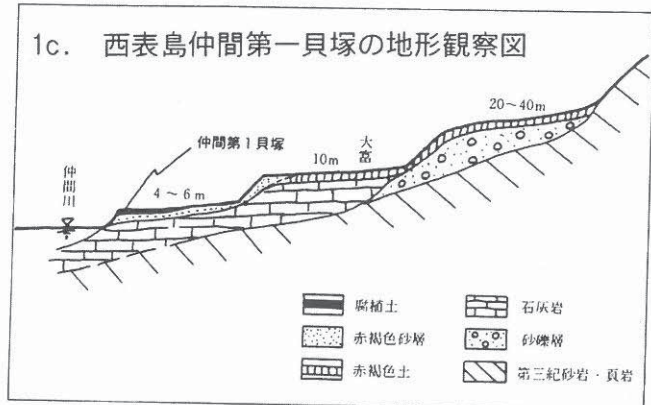
1a. 1989年に提起した編年。

（安里嗣淳 1989）



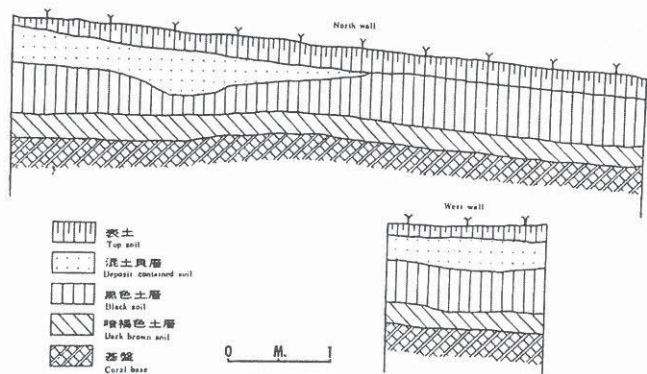
1b. 波照間島下田原貝塚の層序図

（金関丈夫ほか 1964）



第2図 仲間第一貝塚付近の地質断面図

（國分直一・古川博恭・三島格「沖縄・仲間第一貝塚採集の石器」『南島考古学』No.7, 沖縄考古学会、1981.12）

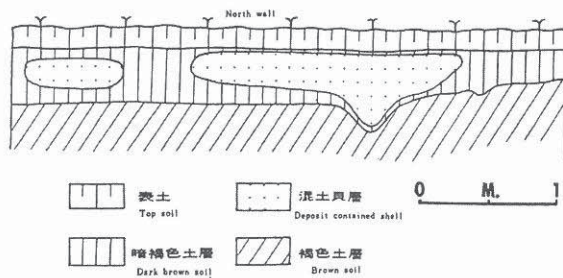


第35図 仲間第一貝塚、IIトレンチおよび西壁貝層断面図

Fig. 35. North and west soil sections of the Nakama I. shell-mound.

1d. 西表島仲間第一貝塚の発掘層序

（西村正衛ほか 1960）



第31図 仲間第二貝塚北壁断面図

Fig. 31. Northern soil section of the Nakama II. shell-mound, Iriomote.

1e. 西表島仲間第一貝塚の発掘層序

（西村正衛ほか 1960）

図1 1989年の編年と國分直一の指摘した層序図

層の上、標高約 9 m の位置にある。遺物包含層の主体は土であるが、名蔵礫層に由来するとみられるチャートや石英等の角礫を多く含む。

この小丘の下方は名蔵湾の広大な砂地の奥地になっていて、無土器期（後期）に属する神田貝塚があり、丘の麓と接する地点で大田原遺跡の層が下層に、神田貝塚の層が上層に位置することが1978年の発掘調査において確認され、八重山における新石器時代編年を見直す契機となったことで知られる。

3.1.2 平地原遺跡（石垣島）（金武正紀ほか 1980）

大田原遺跡と同じ名蔵湾に面し、南側最奥部の標高約10mの丘に形成される。遺跡の西側を小川が流れ、名蔵平野の砂丘地湿地に注ぐ。丘はバンナ岳の麓にあたり、礫岩層が多くみられる。

3.1.3 フーネ遺跡（石垣島）（新田重清 1979）

同じく名蔵湾に面する。フーネ第一遺跡は標高10m前後の赤土の丘に形成される。調査報告書ではさらに下の段にもあるが、標高は記されていない。しかし、いずれも赤土層の低い丘である。隣接する下方の砂地には、無土器期の文化層が存在する。

3.1.4 ピュッタ遺跡（石垣島）（島袋綾野 1997）

島の西海岸、標高 5 m 前後の海岸低地の小平地に形成される。後背地の山麓から降ってくる沢が谷間をつくり、堆積した流土が海岸近くで小さな平地を形成している。遺跡はこの平地にある。土壌は砂地で一見海浜砂丘に間違えるが、後背地に茂登岳の花崗岩を起源とする陸成砂である。したがって、遺跡立地としては他の下田原期における赤土層の小台地と同様、海岸の低い丘の範疇に属するといえる。

3.1.5 仲間第二貝塚（西表島）（西村正衛ほか 1960）

島の東海岸、仲間川の北河口に面した海岸の標高約 5 m の低い石灰岩上の赤土台地に形成される。畑耕作によってかなり攪乱されているが、当時は赤土面を生活面にしていたことは確かである。

3.1.6 下田原貝塚（波照間島）（西村正衛ほか 1960、金関丈夫ほか 1964、木下尚子1987、金武正紀ほか1986）

島の北海岸、標高 3 ～ 9 m の低い石灰岩台地に形成される。石灰岩を母岩とする赤土層（マージ）の上に包含層がある。島は南から北にかけてゆるやかに傾斜していて、この貝塚一帯で海岸に至る。隣接して砂地があり、そこに無土器期の大泊浜貝塚が形成されている。その包含層の一部は赤土の下田原貝塚の層に載っていることが判明した。

3.1.7 添道遺跡（多良間島）（岸本義彦 1993, 1996）

島の北側、現在の北海岸より約150m内陸部に入った石灰岩低地の赤土層と砂丘の接点一帯に形成されている。小山を形成する大砂丘の東側（Ⅰ地点）と西側（Ⅱ地点）とが発掘され、東側は標高 9 m 前後の赤土層の上部で砂混じり層であるのに対し、西側は標高12m前後の砂丘層中に形成されている。この西地点が、南琉球で唯一の海成砂丘に立地する下田原期（前期）の遺跡である。

しかし、このⅡ地点も現在の海岸から約150m内陸部の、しかも標高が12m前後の位置にあり、無土器期（後期）の海浜砂地の様相とは異なるといえる。

3.2 土器を伴わない遺跡

3.2.1 神田貝塚（石垣島）（金武正紀ほか 1980）

名蔵湾の広大な砂地の東奥部、赤土の低い丘に接する地点にあり、貝塚の標高は1.8～3 m である。北隣に名蔵川が流れる。上方の丘には有土器期の大田原遺跡がある。

3.2.2 名蔵貝塚群（石垣島）（新田重清 1979、安里嗣淳ほか 1981、島袋洋ほか 1985、島袋綾野1997）

名蔵湾に面する広大な砂地で、標高2.5～3.5mと低い。貝塚は数カ所に点在しているようであるが、

耕作等によってかなり攪乱されており、本来の状態は把握できない。ところによっては湿地になっている。

3.2.3 フーネ第二遺跡（石垣島）（新田重清 1979）

名蔵湾に面する砂地で後背地の低い丘との接点、標高約3 m付近に形成されている。

3.2.4 崎枝赤崎遺跡（石垣島）（阿利直治 1987）

名蔵湾の北海岸に面する広大な砂地に形成されている。屋良部半島のつけ根にあたるところで、貝塚の標高は2～3 mである。

3.2.5 吹通川河口遺跡（石垣島）（大浜永亘ほか 1978）

島の西海岸、吹通川の河口一帯の海浜砂丘、標高2～4 mの位置に形成されている。砂丘をはさんで両側には標高10 mを越える石灰岩の小丘が海岸に向けて突出している。

3.2.6 船越貝塚（石垣島）（岸本義彦 1979）

島の東北海岸の砂丘、標高3～4 mの位置にある。貝塚一帯を浦川の支流が流れている。砂丘のつけ根には赤土（マージ）層があり、山手へ向かってしだいに高くなっていく。

3.2.7 嘉良嶽貝塚（石垣島）（盛本勲 1992）

島の東海岸、広大な砂丘のなか標高5～6 mの位置にある。基盤砂層は海岸側に向かって枝サンゴ混じり白砂、山手側に向かって礫混じりの黄褐色砂となっている。一帯を小川が流れる。

3.2.8 大泊浜貝塚（波照間島）（金武正紀ほか 1986）

島の北海岸、石灰岩台地がしだいに低くなって海岸にいたるところに形成された小砂丘である。砂丘の現表面は標高約8 mであるが、発掘成果によれば隣の石灰岩台地にある有土器期の下田原貝塚の形成時には砂丘はなかった。その後砂地が堆積するようになり、標高約3.5 mのレベルあたりから大泊浜貝塚が形成されはじめ、砂丘と貝塚の堆積をくりかえしながら現況のように石灰岩台地とほぼ同じ標高になったことが判明している。

3.2.9 カイジ浜貝塚下層（竹富島）（金城亀信ほか 1994）

島の南海岸の砂丘にあり、標高約3 mの下層が無土器期の包含層である。上層はグスク時代初期に位置づけられる滑石石鍋模倣土器が出土しており、先史時代から次の段階へ移っていく時期の様相を示すものとして注目される。

3.2.10 仲間第一貝塚（西表島）（西村正衛ほか1960）

島の東南岸、仲間川の河口近くの北岸に堆積した標高5～6 mの砂丘に形成されている。下層は石灰岩を基盤とする小台地の無遺物褐色土層になっていて、貝塚はその上の砂層に載っている。

3.2.11 船浦貝塚（西表島）（Richard J. Pearson 1969, 1981, 1990）

島の北海岸の広大な船浦湾に南面し、海岸から約200 m内側にある。北側には標高15 mほどの石灰岩の露頭がある。貝塚は標高1～2 mの砂地である。

3.2.12 西高嶺遺跡（多良間島）（西銘章 2000）

島の北海岸は標高10 m前後の砂丘が堆積していて、遺跡はその後背地砂地に形成されている。遺跡一帯の地表標高は12 mで、発掘によって確認された後期文化層は7～8 mの位置に形成されている。

3.2.13 長間底遺跡（宮古島）（安里嗣淳 1984）

島の東北海岸、後背地を石灰岩台地に囲まれた広大な砂丘のなかに形成されている。後期の包含層は標高1.5 mと比較的低い。後背地の中間から湧水が流れだして小川をつくり、遺跡地を通して海に注いでいる。

3.2.14 浦底遺跡（宮古島）（Asato, Shijun 1990）

島の東北海岸、後背地を石灰岩台地に囲まれた広大な砂丘のなかに形成されているのは長間底遺跡に共通する。西側では後背地の中間位置から湧き水が東側では丘の上端近くから湧き水が砂丘地に流れ込んで小川をつくっている。包含層は標高2～3mの位置に形成されている。

3.2.15 アラフ遺跡（宮古島）（江上幹幸 2003）

島の北海岸にあり、立地環境は長間底、浦底両遺跡によく似ていて、後背地に石灰岩台地をひかえた海岸砂丘である。標高は不明だが、離水した広大な砂丘は2～4mの間に位置するものとみられる。

3.3 トウグル浜遺跡の立地

与那国島の北海岸、小川が流れ込む小さな浜の西側、石灰岩の低い岩礁地帯に形成される。包含層のある地域は標高6m前後の赤土の平坦面になっており、それを囲むように周囲には石灰岩の露頭がみられる。この赤土の上に褐色の土層があり、そのなかでもとくに黒色を帯びる層が下部に部分的に形成されているところもある。いずれも遺物包含層である。もともとこの赤土層の上には厚さ1mほどの砂地が載っていて、採砂で失われた後ではあったが、周囲に残された砂層断面中に黒色の腐蝕砂層も観察できた。しかし、その黒色砂層の断面からは人工遺物は検出できなかった。

4. トウグル浜遺跡の編年的位置の検討

1985年に刊行された沖縄県教育委員会の発掘調査報告書では、この遺跡の所属は無土器であることを根拠に早稲田編年の第一期とした。また、地層の観察から國分直一が下田原期の可能性を指摘した後にも、私の提起した編年では後期（無土器期）として配置した。その時点では、やはり土器が確認されない以上、前期に配置することに躊躇したのである。しかし、前述したようにその立地条件のことが気にかかっており、当該編年でもあえてトウグル浜遺跡については前期の可能性も示唆するような注記をしておいた。長年気にかけていたことであるが、このほどかつての國分直一の指摘に沿ってその立地環境を考察し、編年の再検討の根拠とする。

4.1 前期遺跡の立地の特徴

さて、これまでみてきたように有土器である下田原期、私の編年にいう前期の遺跡立地は、前項で概観したように1例を除いて海岸に近い低い赤土小台地および陸成砂地小台地である。下田原期の遺跡が赤土の小台地上に形成されているということについては、古くから多くの研究者によって指摘されてきたが、その後に発見された遺跡も同様の特徴を備えている。石垣島のピュッタ遺跡は一見砂丘のようであるが、花崗岩を源として風化浸食によってできた砂が沢を伝って流出堆積したもので、谷間の出口で小平地をなしている砂質の土壌ともいえるべきものである。したがって、海岸に面した低い小台地という前期の立地条件に共通している、と解することができる。すぐ前の一段低い海岸は砂地の浜である。

問題は唯一の例外となる多良間島の添道遺跡である。東地点の遺物包含層は石灰岩上の赤土層を基盤に形成されているが、西地点は明らかに砂層中に存在する。発掘調査報告書（岸本義彦ほか1996）におけるF-3・G-3グリッドのV層は下田原期包含層、VI層が地山層であるが、いずれも砂層である。G-7・H-7グリッドの4層は無数の礫を含む下田原期包含層、5層は移行層、6層は地山層で、やはりいずれも砂層である。この包含層の標高は9m前後に位置していて、かなり厚く高い砂丘である。また、周知の前期遺跡中もっとも内陸部にある。したがって砂地に形成されているといっても、後期における海浜砂丘とは地形的な様相が異なるといえる。この点についてはあらためて触れる。

4.2 後期遺跡立地の特徴

後期についてもすでに指摘されてきたように、また前項で概観したようにその立地は海浜に隣接し

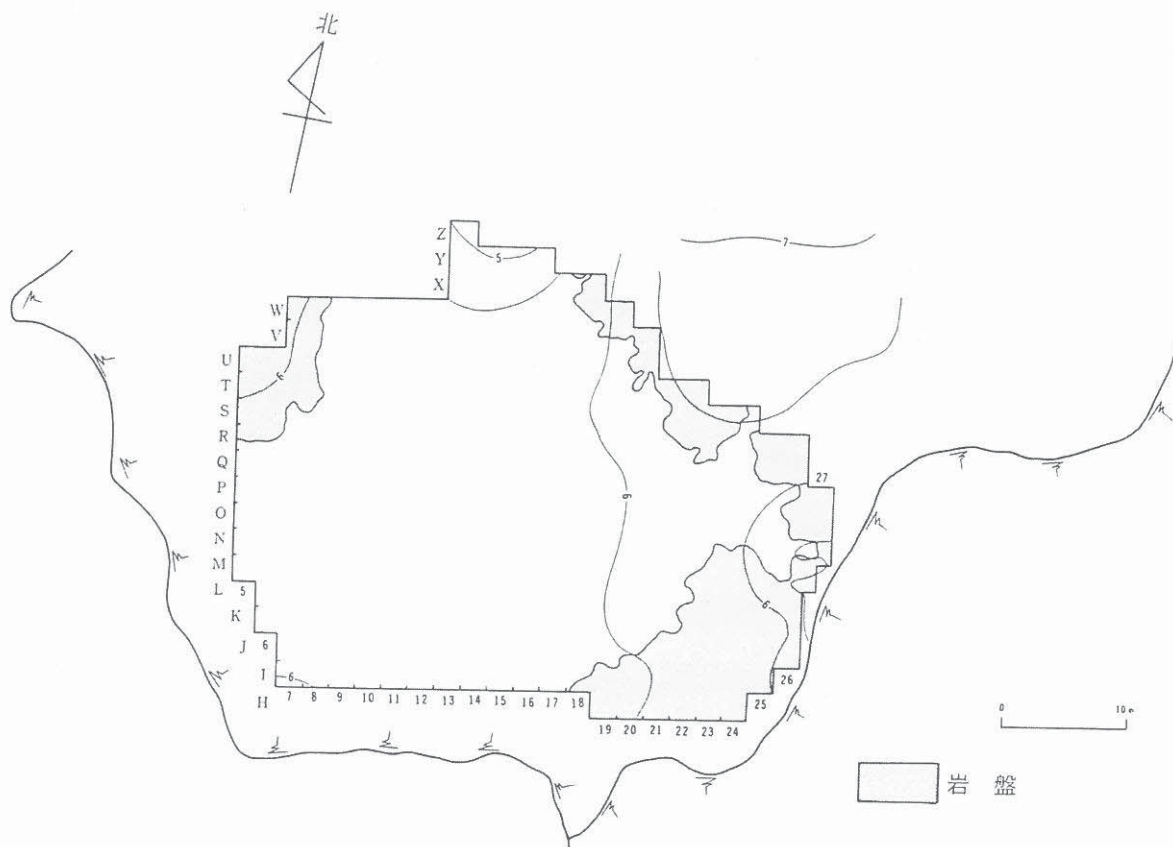


図6 発掘グリッド設定と地形

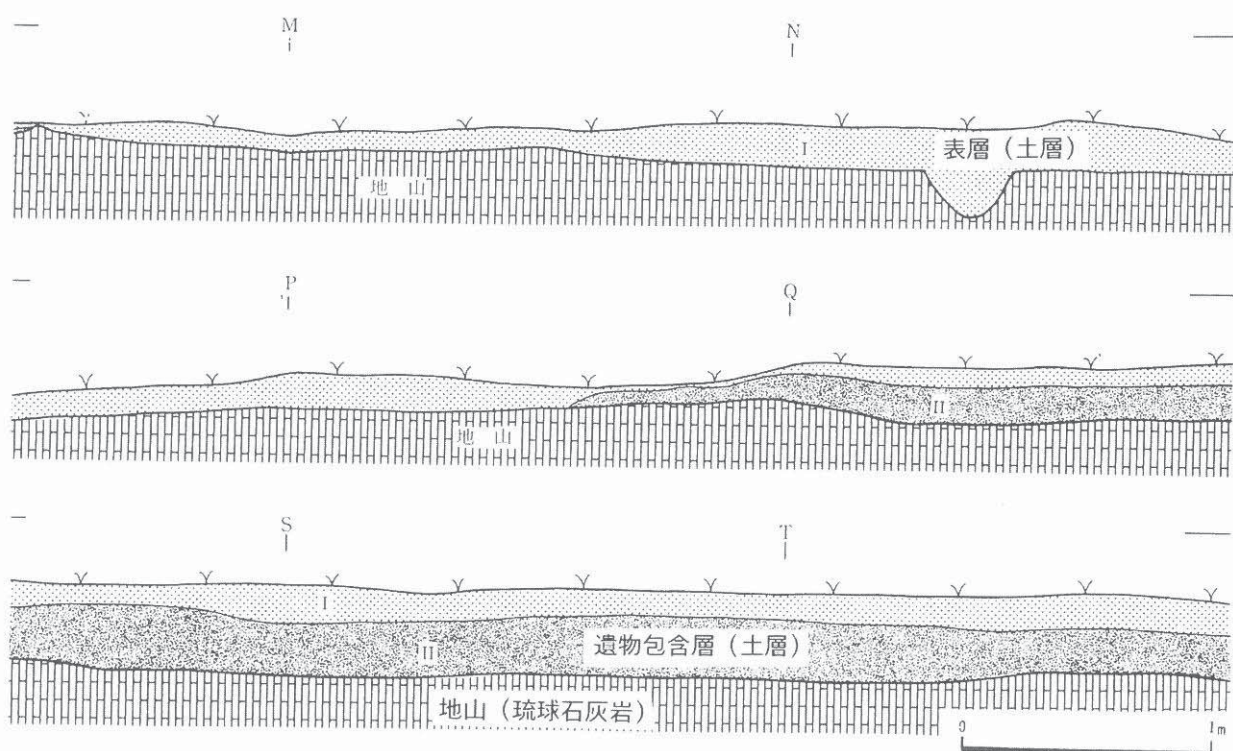


図7 層 序

図2 与那国島トゥグル浜遺跡の地形と発掘層序

た新期砂丘である。現在の海浜につながる砂地で汀線より数10m後方の離水した位置にあって、平均的な標高は2～3mである。西表島の仲間第一貝塚は5～6mだが、河口であることから河川の氾濫による川砂の堆積も考慮すると、一般的な海浜砂地よりは高くなることが理解できる。また、波照間島の大泊浜貝塚は標高3.5mのレベルから貝塚の形成が始まり、さらに堆積を続けて約7mに至っているが、ここは北海岸であることから後期と同時進行で「吹き上げ砂丘」的な形成があったものと考えられる。

4.3 トウグル浜遺跡の立地をどう理解するか

以上の検討によって、南琉球新石器時代の前期は小台地上に、後期は海浜の離水した新期砂丘に形成されるということは基本的特徴として指摘できる。すると、トウグル浜遺跡は海岸の小台地にあるので、その点だけでいえば当然前期に属するといえる。土器が発見されていないのは現在も変わらない状況ではあるが、結論からいうと赤土層に形成された包含層は前期に含めるべきだろうと考える。それは次の理由による。

前期遺跡は一貫して小台地上に形成されているという地形上の特徴は、重要な要素であり、それは地形形成の年代上の位置をも意味するものとみられる。すなわち、後期の包含層を形成する新期砂丘はこの赤土層の遺物包含層より後に形成されていることは、石垣島における大田原遺跡と神田貝塚の関係、波照間島における下田原遺跡と大泊浜貝塚の関係および西表島の仲間第一貝塚の地層と仲間第二貝塚の地層の比較などから明らかである。この状況をトウグル浜遺跡にあてはめて考えると、調査報告書に記してあるように赤土層の上にはかつて30～100cmの砂層が堆積していた。この砂地が他の後期遺跡の砂地に相当するものと考えられるのである。新期砂丘に属するもので、下田原期、すなわち前期にはこの類の砂丘はほとんどないか、わずかな堆積にすぎないことは波照間島大泊浜貝塚の砂層観察から明らかである。おそらく、石垣島の大田原遺跡、フーネ遺跡、ピュッタ遺跡などの形成期には遺跡のある小台地は海岸にかなり近く、下方には未だ新期砂丘はそれほど形成されていなかったのではないかと。そして、前期の終末期頃おそらく2千年前をそれほど遡らない時期に離水した新規砂丘を形成しはじめたのではないかと。この砂丘において後期の人々の生活が展開され、包含層を堆積していったのであろう。

ここに貴重な報告がある。古川博恭が琉球列島の遺跡の地層を観察した論考で、与那国島トウグル浜遺跡に隣接する砂丘断面の観察も扱われている（古川博恭 1980）。これによると図2のように標高9mの砂層のなかに2枚の黒色腐植土層があり、上層腐植土層は八重山式土器をともしない、下層の腐植土層は無土器層である。しかも下層は明らかに島外から持ち込まれた石が含まれており、年代測定結果も1,620B.P.、1665B.P.の値が得られている。すなわち、後期の無土器期に含まれる年代なのである。古川によれば琉球列島における新期砂丘の形成はきわめて斉一性の高い事件によるものであり、砂丘の大部分は2,400B.P.以降の堆積物であるという。このことに照らしても、トウグル浜遺跡の包含層の土層は新期砂丘の下部に存在するわけであるから、当然後期より前すなわち前期に属することは明らかである。

この場合、多良間島の添道遺跡は前期に属するにもかかわらず、砂丘に形成されていることに矛盾があるように見える。しかし、前項でふれたように添道遺跡の存在する砂丘は海岸から約150mも内陸部にあり、標高は9m前後と他の後期遺跡の砂地と比べて約3mも高い。ここは島の北海岸に面したところであって、北風にあおられた吹き上げ浜的な砂丘形成が古くから進行し、前期の時期にはすでに付近の石灰岩台地と一体となった地形を形成していたとみられるのである。つまり、添道遺跡は内陸部の砂地を含めて前期における赤土の小台地と同じような地形であって、たまたま東地点では赤

土の台地に居住し、西地点では砂丘上に居住したものと理解できる。この砂丘は古砂丘に属し、北側海岸の新期砂丘とは形成の年代が異なると解すべきであろう。

前期は海岸に面した小台地に居住していたことについては、現在のところ共通の特徴であることが再確認できる。トゥグル浜遺跡の上層にあった砂層は新期砂丘で、後期の遺跡が形成されるとすればこの砂層でなければならない。もちろん、別の場所の上層にもともと砂層をもたない石灰岩台地においては、後期およびその後に遺跡ができる可能性はある。しかしトゥグル浜遺跡は、新期砂丘の形成が開始された時点で赤土小台地が覆われたということになる。そうすると、攪乱でない限り両層の間にその後の別の層は形成されないはずである。すなわち、発掘調査において確認された赤土由来の土層であるⅠ層とⅡ層の遺物包含層は、後期直前および後期と同時進行で形成された新期砂丘に「時間の蓋」をされているのである。このような事実から1983年に発掘されたトゥグル浜遺跡の年代は前期に属せしめるべきである。

4.4 出土遺物の比較

遺跡の立地からトゥグル浜遺跡は前期に位置づけられるべきだとしたが、土器を除く出土品においても前期的様相がみられるのであろうか。ここで、トゥグル浜遺跡出土品と他の前期・後期遺跡出土品とを比較してみたい。

4.4.1 石器

石器は石斧、石製ドリル、敲打器、すり石、砥石、石皿が出土している。

4.4.1.1 石斧

まず、南琉球の石斧は粗面整形が主であるという共通点が両期をとおしてみられる。粗面整形というのは、従来いわれてきた半磨製、局部磨製などの表現を全体的な器面の状態から表現を変えてみたものである。トゥグル浜遺跡出土の石斧は平面形でみると、全体形が頭部と刃部の角が丸味をもつ短冊形が多く、長さは12cm以下の比較的小型の石斧が多い。三角形のいわゆる撥形は少ない。刃は多くが弧状をなす。厚さは扁平形から楕円形までである。刃が胴部（基部）よりも細い狭刃形石斧も多い。（報告書では尖斧の用語を使用し、南方との関連の可能性を指摘したが、高宮廣衛氏の論考によれば海外における尖斧との混同の恐れがあるので、同氏が命名した狭刃形石斧の名称を用いる）。断面が方形で片刃の磨製石斧は出土していない。

他の遺跡においては、平面形撥形は前期に少ない傾向があり、狭刃形石斧は両期によくみられる。磨製柱状片刃石斧がわずかながら崎枝赤崎貝塚、船越貝塚にみられ、後期特有の可能性はある。断面が方形をなす石斧自体は前期・後期をとおして存在するが、この2例とは趣を異にする。

4.4.1.2 石錐

トゥグル浜遺跡で細長く小さな石製品を石製ドリルとした。これに類するとみられるものは下田原貝塚（前期）にあり、尖頭器および鏝状利器として報告されている。他の遺跡では未発見である。

4.4.1.3 敲打器・磨石

両期によく出土する。

4.4.1.4 砥石

トゥグル浜遺跡以外ではピュッタ遺跡、下田原貝塚（以上前期）と仲間第一貝塚、名蔵貝塚群（以上後期）で出土している。しかし、これは石皿としているものと区別がつきにくいこともあるので、器名は再検討を要する。

4.4.1.5 石皿

トゥグル浜遺跡以外では下田原貝塚、フーネ遺跡、ピュッタ遺跡（以上前期）で出土している。後

期では唯一嘉良嶽貝塚で大型の石皿が得られている。

4.4.2 貝器

貝器はトゥグル浜遺跡では剥離痕をもつヤコウガイ蓋、貝珠、貝匙、有孔巻貝が出土している。ほかにクモガイ突起部加工品と、シャコガイ製貝斧とみられるものが表面採集で得られている。他の遺跡で両期に共通し後期に多い、スイジガイ棘状突起加工品は出土していない。

4.4.2.1 剥離痕をもつヤコウガイ蓋

トゥグル浜遺跡では446個も出土している。自然形も含めると1,529個も出土しており、きわめて特異な状況といえる。ところが身（本体部）の方は推定最小個体数が95個、総重量が62kgと蓋の数に比べるとかなり少ない。ヤコウガイが交易の対象であったのかと思わせるようなデータだが、本論の目的ではないので触れない。他の遺跡では下田原貝塚（前期）の22個のみが知られる。

4.4.2.2 貝珠

主にイモガイ科の小さな貝の殻頂部を小玉状に加工したものである。全体的に出土数は少ない。下田原貝塚（前期）では比較的多量だが、名蔵貝塚、浦底遺跡、アラフ遺跡（以上後期）でわずかに得られているだけである。

4.4.2.3 貝匙

トゥグル浜遺跡ではわずかに1個だが、イモガイ科のニシキミナシガイとみられる巻貝の腹部を分割してスプーン状に切り取り、周縁を加工したものがあつた。貝種は異なるが、他の遺跡では下田原貝塚（前期）でオオベッコウガサガイ製、大型のタカラガイ製が、大泊浜貝塚（後期）ではヤコウガイ製が得られている。総数はかなり少ない。

4.4.2.4 有孔貝製品

わずかに巻貝と二枚貝が各1個だけだが、巻貝はオニコブシ貝に、二枚貝はリュウキュウサルボウ貝に孔を穿ったものである。他の遺跡ではサそのほかに有孔のヒメジャコ、シレナシジミなども得られている。両期にまたがる。

4.4.3 骨牙器

トゥグル浜遺跡の骨牙器にはサメ歯製品、骨錐、骨針がある。サメ歯製品には北琉球のような貝や石で模倣したものは得られていない。また、猪歯歯製品も出土していない。

4.4.3.1 サメ歯製品

トゥグル浜遺跡で6点、下田原貝塚（前期）で20点の他、宮古島の浦底遺跡、アラフ遺跡（以上後期）からも出土している。まだ遺跡数は少ないが両期にまたがる。

4.4.3.2 骨錐

イノシシの骨を利用したもので、トゥグル浜遺跡で3点得られた。他に下田原貝塚の10個以外は後期のみで、隣の大泊浜貝塚、宮古島の長間底遺跡、浦底遺跡から少量得られている。両期に共通する。

4.4.3.2 骨針

トゥグル浜遺跡で2点、他の遺跡では前期の下田原貝塚で13個得られているだけである。

4.4.4 外来品・模倣品

後期の後半に中国唐代の銭貨「開元通寶」が、終末期に奄美徳之島産カメヤキ、九州産滑石製石鍋およびその模倣品、中国産玉緑白磁が南北琉球諸島に流布しているが、トゥグル浜遺跡では出土していない。

4.5 出土遺物からみたトゥグル浜遺跡の傾向

前項で出土遺物から前期と後期の比較をしてみたが、明確に相違を指摘できるのは土器が前期に、

南琉球新石器時代遺跡出土資料比較表

○印は出土が確認された遺跡と資料 △印はグスク初期の土器

時 期 区 分		前 期							後 期														
遺 跡 名		平 地 原 遺 跡	大 田 原 遺 跡	フ ー ネ 第 一 遺 跡	ピ ュ ッ タ 遺 跡	仲 間 第 二 貝 塚	下 田 原 貝 塚	添 道 遺 跡	ト ウ グ ル 浜 遺 跡	名 蔵 貝 塚 群	神 田 貝 塚	フ ー ネ 第 二 遺 跡	崎 枝 赤 崎 貝 塚	嘉 良 嶽 貝 塚	大 泊 浜 貝 塚	仲 間 第 一 貝 塚	船 浦 貝 塚	カ イ ジ 浜 貝 塚	船 越 貝 塚	西 高 嶺 遺 跡	長 間 底 遺 跡	浦 底 遺 跡	ア ラ フ 遺 跡
石 器	石 斧	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	
	石 錐						○		○														
	石 鑿						○																
	有 孔 石 塊									○	○		○										
	磨 石	○	○		○		○		○	○	○		○				○	○			○		
	敲 石	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○	○			○		
	砥 石				○		○		○	○						○							
	石 皿		○		○		○		○					○									
土 器		○	○	○	○	○	○										△					△	
貝 器	貝 斧									○			○								○	○	
	ヤコウガイ蓋						○		○														
	スイジガイ利器						○	○		○			○		○			○			○		○
	有 孔 卷 貝				○		○		○	○					○						○	○	
	有 孔 二 枚 貝				○		○	○		○					○		○				○		
	貝 刃				○		○																
	貝 珠						○		○	○												○	○
	貝 盤												○									○	
	貝 匙						○		○						○								
骨 歯 牙 器	サメ歯製品						○		○													○	○
	骨 針						○		○														
	骨 錐						○		○					○							○	○	
	有 孔 椎 骨						○																
	猪牙齒製品						○														○		○
外 来 品	鉄 製 品														○	○	○	○					
	開 元 通 寶												○	○		○							
	滑 石 製 石 鍋														○								
	石 鍋 模 倣 土 器																	○					
	カ メ ヤ キ														○								
	玉 縁 白 磁 碗														○								

注 トウグル浜遺跡で貝斧が発掘地区外から表面採集されている

シャコガイ製貝斧が後期に特有のものであるという点だけである。石錐、石鑿、剥離したヤコウガイ蓋、貝刃、骨針などにも時期的偏りがみられるが、ヤコウガイ蓋を除いては数量的に少なく、判断が難しい。剥離したヤコウガイ蓋は北琉球においては後期に集中している。もしもトゥグル浜遺跡が前期に属すると、南琉球では前期にのみ見られるということになる。

有孔石塊および大型の貝盤は後期特有のものだと考えるが、ここでは保留しておきたい。石斧についてはその形態により若干の時期的相違があるようにみえるが、統計的な傾向であり、個別の石斧それぞれ自体によっては区別しがたい。このことは高宮廣衛の研究によっても明らかである。むしろ粗面整形という特徴が両期をとおして指摘でき、基本的には前期と後期に明瞭な相違はない。よくいわれる短冊形石斧、狭刃形石斧も両期に共通するのである。したがって、ここでは石斧の細分による比較は表示しなかった。なお、岸本義彦も指摘するように、厚手の磨製柱状（方角）片刃石斧も後期特有だという印象をもっているが、下田原貝塚（前期）に出土例があり、後期に限定されない。

前期には土器があり後期にはないこと、後期には貝斧があり前期にはないことはおそらく不動の特徴であろう。

さて、これらの状況とトゥグル浜遺跡の出土品とを比べると、いくつか前期との共通性がみられるが、未だ不確定要素のある資料項目であり、これをもって前期に属するとみることはできないだろう。しかし、一方で貝斧や有孔石塊、それに大型貝盤がトゥグル浜遺跡にないことは、この遺跡を後期に属させる決定的な根拠も欠いているといえる。

4.6 トゥグル浜遺跡採集のシャコガイ製貝斧

調査期間中、発掘地区のすぐ外の地表からシャコガイ製の貝斧とみられるものを採集した。刃部を欠いているので決定的ではないが、残存部の形態からまず貝斧とみてよいだろう。貝斧は発掘においては得られていない。それではこの貝斧はどこに属するのであるだろうか。ここで、上層にかつて存在した砂層について考えたい。発掘地区の西側には砂層があり、そのなかに黒色の層もみられたが、断面からは人工遺物は検出できなかったことは前述した。この砂層には後期の包含層とみられる腐植砂層が存在していたことは古川博恭の論考で指摘したとおりである。後期の遺跡の場合、なかなか人工品を検出できないことがある。宮古島の長間底遺跡、アラフ遺跡も調査範囲のわりには人工品がかなり少ない。多良間島の西高嶺遺跡は黒色砂層のなかに火成岩礫の集中、焼土面、獣骨の出土をみながら、結局人工品の発見には至らなかった。そもそも貝斧を伴う遺跡は石斧がかなり少ない傾向があるのである。トゥグル浜遺跡表面採集のシャコガイ製貝斧は、付近に後期の遺跡が存在することを示唆するものとして位置づけたい。

結

以上、トゥグル浜遺跡の立地、出土品について他の南琉球新石器時代遺跡との比較をしながら検討してみた。土器が発見されていないという点をのぞけば、トゥグル浜遺跡は前期に位置づけても十分にその条件を満たしているといえる。また、それは後期であるとする決定的な状況をもっていないことも確認された。石灰岩を基盤とする赤土の小台地に生活面をもち包含層を形成していること、その上にかつて存在した砂丘は新期砂丘であり、年代的にもその砂層下の赤土中の包含層は後期よりも古い時期であるべきことも確認した。むしろ、地層からすると後期のままでは問題があるとさえいえる。

現状は、土器が出土すれば前期として確定できる状況にあるといえる。そうすると、前期に土器を製作使用しない集団や文化が存在したのかということになる。現時点では、そのように解するのではなく、いずれ隣接地域で土器が発見されることを期待したい。土器を欠いているという重要な弱点を

かかえつつも、私の編年表にトゥグル浜遺跡を後期に位置づけたことを撤回し、前期に属する可能性がきわめて強い遺跡として扱いたい。

(あさと しじゅん：所長)

註

- | | | |
|--------------|-------|--|
| 安里嗣淳ほか | 1981 | 『名蔵貝塚群発掘調査報告』、沖縄県教育委員会。 |
| | 1985 | 『与那国島 トゥグル浜遺跡』—与那国空港整備工事に伴う発掘調査報告、沖縄県教育委員会。 |
| 安里嗣淳 | 1984 | 『長間底遺跡発掘調査報告』、沖縄県教育委員会。 |
| | 1989 | 「南琉球文化圏における無土器新石器期の位置」『琉中歴史関係論文集』、第2回琉中歴史関係国際学術会議実行委員会編 |
| Asato,Shijun | 1990 | " THE URASOKO SITE ", A Sketch of the Excavation in
Photographs , The Gusukube Town Board of Education, |
| 阿利直治ほか | 1982 | 『大田原遺跡』、石垣市教育委員会。 |
| 阿利直治 | 1987 | 『崎枝赤崎』、石垣市教育委員会。 |
| 江上幹幸 | 2003 | 「速報 アラフ遺跡」、『考古学ジャーナル』No.497, 1月、ニューサイエンス社 |
| 大城 慧 | 1979 | 「12.平地原遺跡」、『石垣島の遺跡』、沖縄県教育委員会。 |
| 大浜永亘ほか | 1978 | 『吹通川河口遺跡の調査概要』、沖縄県教育委員会。 |
| 金関丈夫ほか | 1964 | 金関丈夫・国分直一・多和田真淳・永井昌文「琉球波照間島下田原貝塚の発掘調査」、『水産大学校研究報告(人文科学編)』9号。 |
| 岸本義彦 | 1979 | 『ナガタ原貝塚・船越貝塚発掘調査報告書』、沖縄県教育委員会。 |
| | 1993 | 「第5章第1節 多良間添道遺跡」、『多良間村の遺跡—村内遺跡詳細分布調査報告』、多良間村教育委員会。 |
| | 1996 | 『多良間添道遺跡発掘調査報告』、多良間村教育委員会。 |
| 木下尚子 | 1987 | 「八重山下田原貝塚出土土器」『地域文化研究』、地域文化研究紀要2, 梅光女学院大学 |
| 金武正紀ほか | 1980 | 『石垣島県道改良工事に伴う発掘調査報告—大田原遺跡・神田貝塚・ヤマバレー遺跡・附編：平地原遺跡表面採集遺物』、沖縄県教育委員会。 |
| | 1986 | 『下田原貝塚・大泊浜貝塚—第1・2・3次発掘調査報告』、沖縄県教育委員会。 |
| 金城亀信ほか | 1994 | 『竹富島カイジ浜貝塚—竹富島一周道路建設工事に伴う緊急発掘調査報告』、沖縄県教育委員会。 |
| 国分直一 | 1989 | 「八重山の古代文化覚書」『地域と文化』第53・54合併号』 |
| 島袋綾野 | 1997 | 『名蔵貝塚ほか発掘調査報告』、石垣市教育委員会。 |
| 島袋洋ほか | 1985 | 『名蔵貝塚群発掘調査報告書—県道改良工事に伴う緊急発掘調査』、沖縄県教育委員会。 |
| 西村正衛ほか | 1960 | 西村正衛・玉口時雄・大川清・浜名厚「八重山の考古学」滝口宏編『沖縄 八重山』、校倉書房刊 |
| 西銘 章 | 2000 | 「第3章 新多良間空港整備予定地周辺の調査」、『空港整備予定地周辺の遺跡』、沖縄県教育委員会。 |
| 新田重清 | 1979a | 「11.名蔵貝塚群」、『石垣島の遺跡』、沖縄県教育委員会。 |
| | 1979b | 「15.フーネ遺跡群」、『石垣島の遺跡』、沖縄県教育委員会。 |
| 古川博恭 | 1980 | 「琉球列島における文化遺跡包含層の層序と編年」『第四紀研究』第18巻第4号、日本第四紀学 |

- 会。
- 盛本 勲 1992 「新石垣空港建設計画予定地内の遺跡分布調査」、『新空港・空港拡張建設計画予定地内の遺跡』、沖縄県教育委員会。
- Richard J. Pearson 1969 "Archaeology of the Ryukyu Islands ", University of Hawaii Press, Honolulu, Hawaii.
- Richard J. Pearson 1981 Ryukyu Archaeological Research Team " Subsistence and Settlement in Okiawan Prehistory, Kume and Iriomote." Laboratory Archaeology, University of British Columbia, Bancouver, Canada.
- Richard J. Pearson 1990 ピアソン・リチャード 1990・安里進「久米島と西表島における遺跡の発掘」『文化課紀要』第6号、沖縄県教育庁文化課。

追 記

本稿脱稿後に、県立埋蔵文化財センターより依頼していたトゥグル浜遺跡出土の貝殻を試料とした年代測定の結果がもたらされた。結果は以下のとおりである。とくにこのことについて検討する時間がないので、データの報告にとどめる。

年代測定値（補正をおこなっていない値）

① シャコガイ R-22 グリッド II a層 3770±40 y BP

② ヤコウガイの蓋 M-21グリッド II a層 3890±40 y BP

測定者 パリノサーベイ株式会社（東京都中央区日本橋橋本町1-10-5）

依頼者 沖縄県立埋蔵文化財センター

測定期日 2003（平成15）年2月～3月